

## 「山廬俳諧堂」復元建設費ご寄付のお願い

一般社団法人山廬文化振興会  
理事長 飯田 秀實

俳人飯田蛇笏、飯田龍太が生涯作句活動をした住居「山廬」には江戸時代から母屋南側に二階建ての土蔵が建っていました。蛇笏は明治四十年代からこの蔵二階を「俳諧堂」と称し、ながく句会場として使っていました。そして、明治四十三年には歌人若山牧水が十一日間逗留し、俳諧堂で蛇笏と文学論を交わしました。また、蛇笏とともに「ホトトギス」で活躍した前田普羅は、度々俳諧堂での句会に参加し、宿泊しています。

さらに「雲母」の一大事業となった「寒夜句三昧（かんやくざんまい）」の源流となる句会「笹鳴（ささなき）会」の拠点となった蔵でもありました。この蔵二階に蛇笏は高浜虚子直筆の「山廬」扁額を掛け、俳諧堂に集う俳人の研鑽の糧としていました。このように、山廬表蔵「俳諧堂」は飯田蛇笏、雲母あるいは山廬を語るうえで極めて文化的価値の高い建物と考えています。

昭和二十年代、戦後の混乱期にあつて、この蔵は解体されました。六十年近く経ち、この蔵が近隣の農家に移築されていたことが分かり、具体的な調査の結果、老朽化が進み、崩落の危険があることから、山廬文化振興会では「俳諧堂」復元を前提に、蔵を一旦解体、調査した上、現存木材等を慎重に保管しています。

当振興会では平成二十七年、「雲母」の前身である「キラ、」が創刊されて百年の節目にあたることから、具体的な復元計画に着手し、地元笛吹市とも協議を重ねてきました。その結果、笛吹市では「俳句の里づくり事業」の一環として、平成二十八年度「俳諧堂」復元の支援を決め、本体復元費の半額を補助していただけることとなりました。

山廬文化振興会では、「俳諧堂」復元の残りの資金について、より多くの方々のご支援を頂く中で完成させたいと考えています。つきましては、本趣旨にご賛同の上、ご寄付を賜りたく、お願い申し上げます。

尚、「山廬俳諧堂」が復元した後は、俳句を中心とした短詩系の活動、講演会、さらに文化活動の展示発表など、「俳句の聖地」にふさわしい施設としてまいります。また、笛吹市の「俳句の里」の拠点として活用してまいります。

「山廬俳諧堂」復元事業支援賛同者

蛇笏賞受賞者有志  
笛吹市文化協会  
俳句結社「郭公」  
俳句同人誌「今」  
俳句同人誌「件」

# 俳諧堂（蔵二階）について飯田龍太やホトトギスの俳人前田普羅が随筆で紹介している

## 蔵二階のこと

飯田龍太

数年前の初秋のころ、牧水研究にくわしい歌人の大悟法利雄氏が突然訪ねてきた。初対面の氏は、蛇笏と牧水の交遊について、何か知っていることがあつたら訊きたい、明治四十三年の今日は、牧水がここにやってきた日です、と云った。

折角だが、私は氏の研究の参考になるようなことは、何も知らない。せめて七十年前とさして変わりがないだろうと思われるのは、山峡の空のいろ、山の姿だけである。

それに、牧水が十日ほど滞在したという庭先の蔵二階も、戦後間もないころ取り壊して、いまは跡形もない。

この蔵二階は、下が穀倉と作業場になっていて、隅の箱階段を上ると、二階は二十数畳ひと間の部屋になっていた。外見は悪くないが、震度一の際も、正確に感知出来る建造物。その上大工が柱の寸法を間違えたとかで、二階が寸足らず。止むなく梁はむき出しの吹き抜けになっていた。したがって寒さにも暑さにも敏感に反応した。

それが俳人には好都合というわけでもなからうが、寒中はこのでしばしば句会が催された。二夜三夜と続いて、会はしばしば深更に及んだ。農家の人はもとより、医者、教員から床屋さんと、職業年齢はさまざま。三人にひとつ宛ぐらいの火鉢をかこんで、あるいは瞑目し、あるいはかかと眼を見ひらいて屋根裏を凝視し、一語も発することなく案じ入っている風景は、子供ごころに、一種異様な雰囲気に思われた。

会が果て、人々のざわめきと箱階段のきしむ音が灯と共に消えてからも、闇にたつ蔵二階には、苦悩の吐息が充満しているように見えた。

この部屋の隅には、大きな夜具棚があり、いつも数人分の寝具が入っていた。

暁方、戸口で人声がする。出てみると、顔見知りの俳人である。昨晚遅くこちらへ着いたので、あちらで勝手に休ませてもらいました、といって、家人共々朝の食卓につくようながしはしばあつた。（後段略）

昭和五十六年「小説新潮スペシャル」掲載

## 山廬に遊ぶの記（抜粋）

前田普羅

山中に倉の屋根が見える、倉の前には八九人の少年が遊んで居た。自分と蛇笏君の通るのを見て一斉に遊戯を止めたが中から二人の賢こげな少年が進み出て蛇笏君を見た。蛇笏君の息子達であつた。蛇笏君は、

「御客様だからおとなしくなくてはならないよ」

と云ふ。倉の側面を通り過ぎると高い花崗岩の門柱が眼に入る。門を入ると左手にミツチリ青緑の葉をつけた柘榴の樹がある大きな実が幾つも太陽の如く真紅に輝いていた。（中略）

其處へ竹雨一布両君が見え（中略）

折々日影を洩した空はいつか暮れ初め巨幹で暗い奥座敷には蛇笏君等の運動で此の山村にひかれた電燈が灯された。五十燭だと云うけれど横濱の町で見る五燭程の光力しかなかった、しかし夫れも山村らしい気分である此の暗い電燈下で四人膳を並べて夕食をした。

食事終つて四人は中庭を隔てた倉の二階に移り打寛いで談笑する事になつた。倉の階子段は可也急で上り切ると其処には二十畳程の座敷が有り、虚子先生の書かれた「山廬」の額が高く掲げてある。自分の背後には低い天守閣の窓の様な窓がある。肘を掛けると戸が押されて薄暗い外が見えた。此時自分は山廬の客となつた事をシミジミ感じた。（大正九年十一月七日夜）

「ホトトギス」大正九年十二月号



# 山廬俳諧堂復元のための資料写真

一般社団法人山廬文化振興会作製



飯田家家相図(明治期)



俳諧堂の蛇笏(大正7年)  
後方の額は高浜虚子書「山廬」



俳諧堂 龍太撮影(昭和17年)

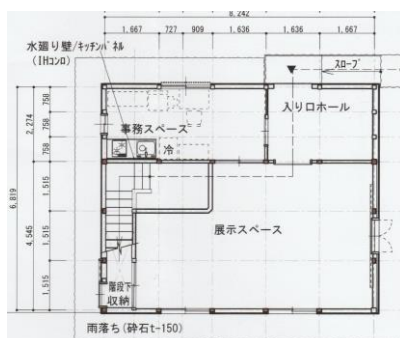
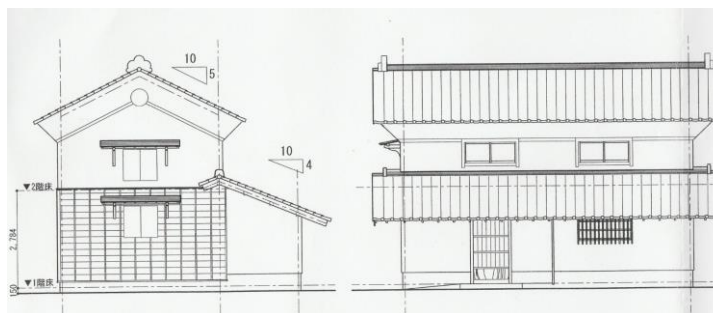
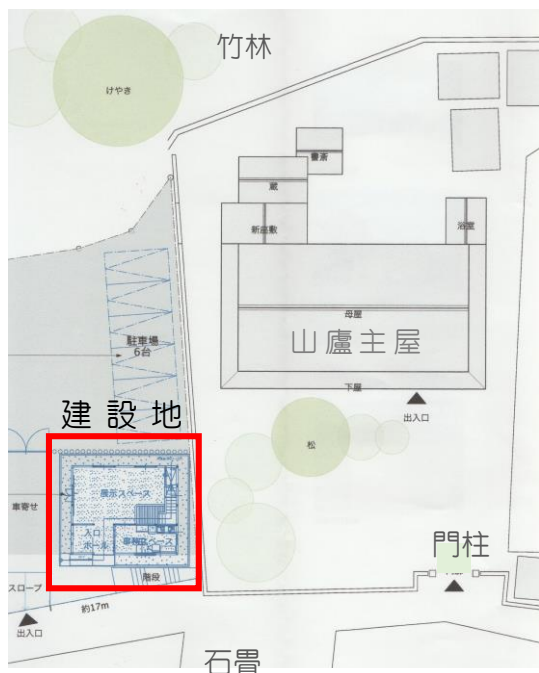


母屋縁側の蛇笏  
後方が俳諧堂

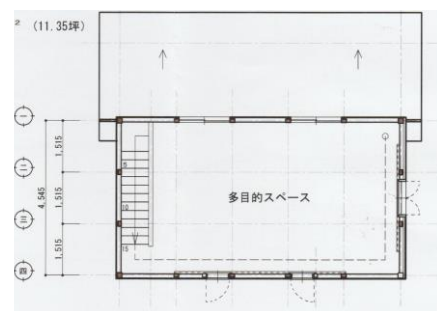


母屋屋根上から 俳諧堂(右)  
(龍太撮影/昭和18年頃)

# 俳諧堂復元図面



1階図面



2階図面



## 俳諧堂復元事業寄付金納付先

金融機関: ゆうちょ銀行 □座記号番号 00190-8-602837

□座名義 一般社団法人 山廬文化振興会

1 □ 5,000円 何□でも可

(振替払込請求書兼受領書を領収証に代えさせていただきます)

## 寄付金目標額

1,300万円 (募集期限:平成29年3月31日)

## 問合せ先

一般社団法人 山廬文化振興会 俳諧堂復元事務局

TEL 055-234-5123 FAX 055-234-5122 Email:sanro-bs@mxe.biglobe.ne.jp